

不良行為を繰り返す少年たちの実態について

1 不良行為少年の補導歴の状況

平成16年6月現在、警視庁が不良行為少年として過去に補導したことがあるとして把握している少年9万9,175人の補導歴の状況は、次のとおりである。

5回以上の補導歴を有する少年は1万1,156人で、全体の11.2%に上る。

補導人員総数(人)	補導歴1回	2回	3回	4回	5回	6~10回
99,175	61,840	15,016	7,057	4,106	2,606	5,585
うち女子29,579	20,568	4,311	1,794	914	569	998
	11~20回	21~30回	31~40回	41~50回	51~60回	61回~
	2,263	471	130	50	26	25
	309	83	22	3	5	3

2 警察職員から見た多数の補導歴を有する少年・保護者の様子やそれらに関する意見 (警視庁でのアンケートから)

終始反抗的な態度で話す。補導する旨を伝えるが、「補導なんて関係ない」という態度を示す。

補導した時点では、「わかりました、すみません、もうしません」等の言動があるが、その後は全く改めようとしなない。補導そのものをもっと厳しく改めるようにしたらどうか。

補導される程度であれば、何の問題もないという安易な考えの少年が大半である。これからも補導問題の在り方を考えさせられる。

悪知恵の働く少年は、連絡先等について、平然と別人のものを語ったり、嘘をついたりするため、補導歴として残すことができない場合がある。

あっけらかんとして悪びれた様子はない。注意しても、その場では「はい、はい」とうなずくが、大して気にしていない。警察官に文句を言うわけではないが、自分の都合のいい嘘をつき、それに対する反省の色は全くない。

保護者は、「言ってもダメなんです」の一点張り。母親の携帯電話に連絡しようとしても、昼夜を問わず、警察からの連絡に応じる気配はなく、少年からの連絡には応じる。タバコを吸っていても、「注意していますから」と軽く流される。少年も母親も更生する必要がある。

補導歴が多い少年の場合、家庭連絡をしても、保護者は「はいはい、わかりました」という程度で、特に気にも留めていない様子であることが多い。